

俳句

大津俳句会

庭の木々目覚めしごとく喜雨^{きう}到る

井芹眞一郎

共に観た映画に想ふ盆の月

相原 朋子

古寺に純白の蓮^{はす}深き白

一上日登美

窓開けし百日紅^{さるすべり}よりのぞかれて

大塚喜久子

奥阿蘇の水の匂へる新豆腐

岡崎 浩子

風鈴のやさしい音色^{ねいろ}通りぬけ

香月のり子

草引いて庭の広がり眺めをり

佐賀 久子

手に置けば風が連れ去る蟬の殻

佐澤 俊子

夜も更けし優しき風のすだれ越し

中嶋 清美

俳句

つのはな句会

梅干してひなたの匂い風の色

村田 健二

天地の騒音^{おと}消え夜半の月青し

志賀 孝子

焦げ臭い八月の雲と地図帳

田上 公代

夕焼けや行方不明の影法師

上杉 波

反核も模様に加えレース編む

矢嶋 道子

戦争のない世 萩の花風にゆれ

梅木トキエ

揚羽蝶樹の間に消えて君の声

塚本 洋子

夜の底線香花火 すぐ落ちる

柴田しのぶ

短歌

大津短歌会・野づかさ

指導 阿木津 英

房重く熟れたる枇杷のつく一木主無き家に夕日があたる

吉田 良子

小さな子は恐竜図鑑に見入りたり空飛ぶティラノサウルス探すと

本田 咲

荒波を聞きつつ寝がたくありしかどいつしか港に働く声す

田中 玲子

夫の遺こす盆栽の鉢にひとりごと言いつつ松の新芽^め摘みゆく

豊岡ミツル

家並みの見える窓辺に寄り立ちて六月の朝の一時過^ごこす

小平 善行

なかなか蕾開かぬ芍薬よ夏の日ざしに枯れてゆくのか

吉永 恵子

ホッホホッホあおばづく啼く家裏の森に潜むや日暮れの森に

坂本 果子

昼休みとなれば基盤をはきみたり一年生と女性校長

鞍 岳志

臥す夫が起き出づるまで待て待てと思ってお膳の前に座れり

山本 泰子

草刈りの済みし畑に降り来ぬスズメの百羽虫啄むと

高村 貴子